

## 2020. 11. 29. アドヴェント第1主日礼拝式説教

### ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書16章 1-13節

#### 『神に仕える』

主イエスは、その地上の生涯において実に多くのたとえをお語りくださいました。なぜこれほど多くのたとえを語られたのか、そこにはいろいろな理由があったと想像できます。一般的にはたとえというのは、あることをわかりやすく伝えるためのものです。しかし主イエスが語るたとえは必ずしもそうではありませんでした。むしろ、かえってわかりにくくなるものがありました。主イエスのたとえほとんどは、神の国を、神さまの支配を伝えようとするたとえでした。つまりこの世のものではないものをこの世のもので指さそうとするたとえですから、単純にわかりやすさが目指されているわけではない。むしろ何を言おうとしておられるのだろう、とわたしたちを立ち止まらせ、考えさせ、わたしたちの常識や、普通に抱え込んでいる価値観を揺さぶり、時にはわたしを砕け散らせ、問いの中に置き、新たな世界の受け取りを促す、そういう性格を持っているたとえだ、と言えます。

したがって主イエスのたとえは、わたしたちの常識や倫理観や道徳を揺さぶる。たとえば道徳訓ではなく、勸善懲悪、最後にはこんな悪い子ではなく、いい子になりましょう、というような話では全くない。わたしたちの目を、神の国、神さまの支配に向けさせることを促すものなのです。

主人の財産を管理する管理人がその財産を無駄遣いし、そのことがばれて、主人の監査を受けることになりました。このままでは職を失う、そう思った管理人はいろいろ思いめぐらします。土方仕事をする体力はない、物乞いするのも恥ずかしい。管理人は必死に考え、自分なりに知恵を働かせ、自分に残された最後の時間を有効に用いて、将来に備えました。

彼のしたことは、主人に借りのある人たちを一人一人呼び、その証文を書き換えさせるということでした。油百バトス借りのある人には、五十バトスとし、小麦百コロス借りのある人には、それを八十コロスと書き換えさせた。これは今のお金に換算すると大変な額です。こうした書き換えによって会計の操作をしたのと同時に、主人に借りのある人たちにこの管理人は恩を売り、万一自分

が首になった時、この人たちが自分を迎え入れてくれるよう、世話になる道を作ったのです。

管理人のしたことは不正を不正で上塗りするような行為です。しかし、主人はこの管理人の抜け目のないやり方をほめた、というのです。驚きです。驚きであり不思議です。ここに躓く人もいます。なぜこの管理人を主人は褒めたのか。このたとえのかなめとなっていることです。

それを知るには8節後半の主の言葉に聞く必要があります。「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢く振る舞っている」。この世の子ら、というのは世俗の世界を生きるものということですが、ここでは信仰によって生きようとしなない人々、ということです。「自分の仲間に対して」とあるのですが、これは直訳すると「自分自身のものに対して」という言葉です。自分自身のもの、というのはここでは、この世のものという意味でしょう。つまり、この世の子らは、自分たちが生きているこの世の事柄、この世で起こることに対して光の子らよりも賢く振る舞っている、というのです。光の子らというのは、キリストの福音の光の中にあることを受けとめた者たち、ということです。15章のたとえで言えば、羊飼いの愛の中にある自分を受けとめたもの、ということであり、父の愛の中にあることを知らされた者、ということです。

この世の子らは、今自分の置かれた状況を的確に見定め、事柄と向き合い、賢く対処しているというのです。抜け目のないやり方と言っていますが、その対処の仕方が有効だ、と言っているのです。もちろんそれはこの世の子らがすべて、というようなことを言っているのではない。この世の子らの中で、そういう人がいる、と言っているのです。

この管理人のしたことは、今でいえば私文書偽造と言えるのかもしれませんが、それを見倣いなさい、ということを行っているわけでもないし、そのように読む必要もありません。キリストはここで、この世の子らは、この世の事柄に対して、賢く対処している。それに見倣いなさい、と主は言っておられるのです。それは光の子らもこの世の事柄に対して、この世の子らと同じように対処しなさい、つまり世事に疎くあってはならないと言っているわけではないのです。

そうではなくて、この世の子らもそうであったように、光の子ら、福音の光の中にあることを受け止めている者たちも、自分自身のものに対して、賢く振

る舞え、と言っているのです。光の子らにとって自分自身のものとは何か。それは神の恵みの中で生きること、福音の光の中で生きることそのものです。この世の子らがこの世のことに対して、賢く対応する。それなら、あなたがた光の子らは福音の光の中で、賢く、自分のすべきことを見定めて生きよ、と呼びかけておられるのです。

この管理人の賢さというのは、状況の判断ということです。この世を生きる経験の中で、彼は今、というときがどういうときなのか、どこへ向かおうとしているのか、それを冷静に判断しながら将来に向けて今自分は何ができるのか、何をすべきなのかを見定め、適切な、かつ有効な行動をとろうとしたのです。

主人はそれを賢い、と評価したのです。そしてこのたとえを語る主イエスの評価でもありましょう。

光の子は、福音の光の中で生きる。それはただ、温室の中で、頭を撫でてもらって何もしない、ということなのではない。

このたとえは、主人の財産を無駄遣いした管理人が会計報告、つまり主人との清算の時が思わぬ形でやってきたことから始まっていました。これは聖書の時代の人々にとって、明らかに終末の光景です。終末の時、それはわたしたちにとって突然のようにやってくるのですが、神の前でわたしたちが最終的な清算をするときであり、このたとえはその光景を語っている。

神から託されたもの、与えられてきたものをわたしは無駄遣いしてこなかったかどうか。与えられたいのち、託された時間、神から注がれてきた愛、それに応えて、十分応答してきたか。無駄遣いというのは、ただお金をばらまくようなイメージではなく、浪費したり、十分な応答もせずダラダラと過ごしてきた、というようなことすべて含むイメージです。しかし、神の前での清算の時は必ず来るのです。というとすぐに、恐ろしいとか怖いと受け取る人がいますが、それは神がわたしたちを本当に愛してくださっているからこそそのことである、ということを受け止める必要があります。もしこの主人が管理人ことをどうでもいいと考えているのなら、清算はしない。即刻首。即刻、罰を与えて追い出し、ということになるでしょう。しかしそうではない。

神の前での清算の時は来る。そうであれば、わたしたちは、この管理人とは違った仕方ではあるけれど、わたしたちとして、今の時を見定め、時がどこへ向かおうとしているのか、自分として判断し、自分にできること、すべきこ

とを見定め、自分としての行動、態度、行いを示していく必要がある。

主イエスがわたしたちにとっても踏み込んだ形で、語っておられるたとえだと言えましょう。つまりルカ福音書の15章の最後のたとえ、二人の息子が登場するあのたとえで、弟は父から分けてもらった財産を無駄遣いして使い果たしてしまった。無一文になってしまった。そして、自分のわがままで父のところへ帰ってきた。そこで弟は、あらためて自分が父の愛の中にあることを知ることになる。その先の生き方、歩み方をこのたとえは語っている。兄は兄で、自分の殻の中に入っていて、弟を愛せない自分を生きてきたが、その兄も父の愛の中にあることを知らされていく。そしてその先。その先の生き方が主イエスによって尋ね求められている。この世の子らはこの世の事柄に対してあなたたちより賢く振る舞っている。状況の判断や、自分のすべきこと、今やることを見定め、行動している。光の子であるあなたは、福音の光の中で生きるものとして、状況をどうとらえ、今自分のすべきこと、やるべきことを見定め、神の愛の応答として賢く振る舞え、そう呼びかけておられる。それが神に仕える、ということだ、と主イエスはこのたとえで語っておられるのです。このたとえを胸に深くとどめたいと思うのです。

2020年のアドヴェントを迎えました。イエス・キリストがわたしたちのもとにおいでくださった、ということ、それは神の愛がわたしたちに具体的に迫ってきた、ということです。そしてそれは、わたしたち一人一人に神の愛に応答する歩みを促していくものなのです。